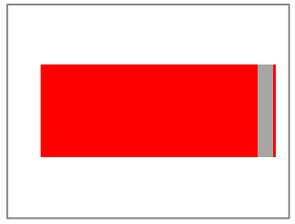
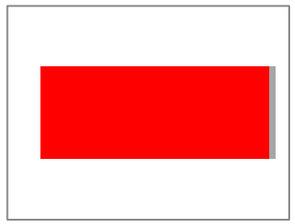
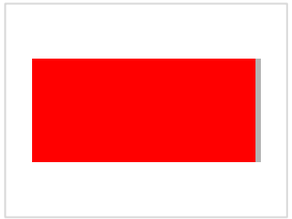
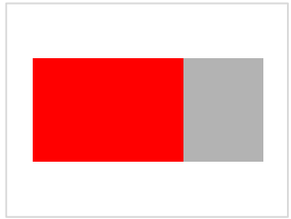
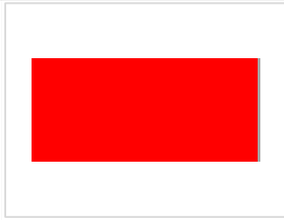
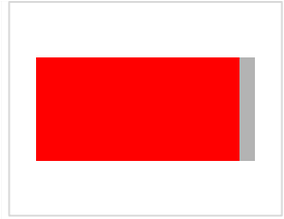
令和3年度　学校自己評価最終

重点目標		具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準						分析と今後の課題
					判断基準	判定基準	達成目標	判定	達成比率	○△	
1 授業実践力の向上	①	児童生徒の育成すべき資質・能力を育むために、授業づくりのポイントを明確にし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりに取り組む。	研究研修課 全学部	【成果指標】(教員) 単元や題材を見通して主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりのポイントを押さえ、授業実践している。	担当する授業において、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりのポイントを意識した授業実践を、各期に1回以上行った教員の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		A	93%	○	授業づくりのポイントを意識して授業実践に取り組んだ教員の割合は、中間結果よりも上がっている。外部講師の講演会、各学部の授業研究等の継続により、授業づくりの教員の理解がさらに深まったと考えられる。「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で単元構成できる教員は多いが、他の視点を意識した取り組みはまだ少ない。複数のポイントを取り入れた単元構成ができるように、取り組んでいく必要がある。
	②	児童生徒が授業の目標を達成できるように、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を計画し実践する。	教務課 全学部	【満足度指数】 (保護者) 児童生徒が授業で「主体的・対話的で深い学び」を体現していると感じている。	授業参観時のアンケート提出者で児童生徒の様子から授業に満足しているあるいはやや満足していると考える保護者の割合	A 70 以上 B 60 以上 C 50 以上 D 50 未満	B		A	98%	○	日頃の授業に「満足している」「やや満足している」保護者の割合は前期と同様の98%で、一年を通して本校の授業を評価している保護者が多いことが分かった。コロナ禍という特別な状況により授業参観の機会は少ないが、日頃の授業への取り組みを伝える一層の努力をし、社会に開かれた学校として児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて取り組んでいきたい。
2 キャリア教育の推進	①	児童生徒の発達段階に応じて、周囲の人と協力したり、積極的に集団参加したりなど協働的に活動に取り組む力を育成する。	キャリア教育推進委員会 全学部	【成果指標】(教員) 自ら進んで、あるいは他者と一緒に、集団へ参加したり周囲の人と協力したりなど、協働的に学習活動に取り組んでいる。	積極的に集団参加したり、進んで周囲の人と協力したりなど協働的に学習活動に取り組んでいる児童生徒の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B		A	98%	○	積極的に集団参加したり、進んで周囲の人と協力したりなど協働的に学習活動に取り組むことができた児童生徒の割合は、中間評価からさらに増え98%となった。児童生徒の実態把握に基づいた上で、個々に応じた「集団参加」を意識した実践が浸透してきていると考えられる。コロナ禍で集団活動の機会が減ってはいるが、学部ごとに活動を工夫して成果を得た。今後は、児童生徒個々のキャリア発達の段階を全体計画の中で確認し、次の段階の目標を意識した実践を行うなど、取り組みを継続していきたい。
	②	本校のキャリア教育全体計画に示したキャリア発達の視点を取り入れた授業実践を行う。	キャリア教育推進委員会 全学部	【成果指標】(教員) 各学部のキャリア発達の視点を取り入れた授業実践を行う。	各学部のキャリア発達の視点を取り入れた授業で、全体計画9項目中の取り入れた項目数が多い教員の割合(5個以上)	A 70 以上 B 60 以上 C 50 以上 D 50 未満	B		B	65%	○	キャリア教育全体計画の9項目のうち5項目以上を取り入れた授業実践を行った教員の割合は、中間評価と比較してやや増加し65%となった。取り入れた項目の中では「意思表現」が最も多く、次に「集団参加」「課題への取り組み」が続く。また、取り組みが少なかった項目は「自己管理」「働く意義」「職業への関心と選択」であった。今後はさらに全体計画の浸透を図り、取り組みが少ない項目の実践例などを具体的に紹介するなどして、小学部から高等部までのつながりのあるキャリア教育を推進していく必要がある。

3 安心・安全な学校づくりと健康・体力の保持増進	①	本校の児童生徒や保護者への教員の丁寧な対応と主体的な挨拶の励行を徹底する。	全学部 総務課	【満足度指標】 (保護者) 教員の挨拶や対応が丁寧で気持ちの良いものであると感じる。	教員の挨拶や対応が丁寧で気持ちのよいものであると感じている保護者の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B	 A 99.7% ○	児童生徒や保護者に対して教員の挨拶や対応が丁寧で気持ちのよいものであると「十分感じる」保護者の割合は73%、「おおむね感じる」保護者の割合が26%になり、合わせて99%となった。保護者からは「担任以外からも挨拶や声かけがあり嬉しく思う」との声がある反面、「関係している児童生徒以外について無関心な職員がいる」との意見もあった。今後は小・中・高のつながりを意識しながら、他学部の児童生徒に対しても目を向けた丁寧な対応をしていきたい。
	②	児童生徒一人一人の運動動作や姿勢等の成果と課題を把握し、維持や改善を図る。	保健体育課 肢体小～高等部	【成果指標】 課題に応じた運動等の取り組みにより、運動動作等の維持・改善がみられる。	運動動作等の維持・改善がみられた児童生徒の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B	 A 92% ○	「維持・改善がみられる」、「維持・改善がみられたが、継続して達成に向けた取り組みが必要である」の割合が合わせて、92%と高い評価であった。児童生徒の身体の状況は日々変化していくため、取り組みをより効果的にするために、金沢こども医療福祉センター訓練士や自立活動部、担任との話し合いの中で当初の取り組み内容を変更したケースもあった。今後は、金沢こども医療福祉センター訓練士、自立活動部との連携をさらに深め、児童生徒の身体の発達の状況に応じて、健康・体力の保持増進を目指し、柔軟な取り組みを継続する。
	③	児童生徒一人一人の実態に応じた体力(持久力・運動を続ける力)の維持や向上を図る。	保健体育課 知的小～高等部	【成果指標】 一定の時間運動を続けることや、時間内の取り組み回数の維持や増加がみられる。	運動を継続する時間や回数の維持増加した児童生徒の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B	 B 73% ○	年度当初と比べ、運動を継続する時間や回数が増加した児童生徒が62%、維持した児童生徒が11%であった。小学部では2，3，4，6年生で増加傾向が見られた。中学部では後期は特に体力づくりや体育等で実態に応じた運動に継続的に取り組み、体力の保持増進できた生徒の割合が増加した。高等部では運動の意義を意識して取り組んでいる生徒の向上が目立った。今後も、児童生徒の実態に応じて長期休業時に使えるような運動の取り組みシートや、思春期の生徒が意欲的に取り組めるよう活動内容を精選して紹介するなど、引き続き児童生徒の体力の維持・向上を目指して取り組む。
4 校務分掌等の改善と工夫	①	校務分掌等の業務の平準化と効率化に努める。	全学部	【満足度指標】 (教員) 校務分掌等の更なる平準化と効率化を推進し、計画的かつ効率的な業務遂行をする。	効率的な業務改善のアイディアから2つ以上取り組み、業務の平準化と効率化が図られたと感じる教員の割合	A 80 以上 B 70 以上 C 60 以上 D 60 未満	B	 A 92% ○	中間評価と比較し、業務の平準化または効率化が図られたと感じた教員は6%増え92%となった。「取り組んだと思わない」「あまり取り組んだと思わない」と答えた教員は、効率的な業務遂行から業務改善の必要性をあまり感じていない教員と、校務分掌による業務負担により効率性まで重視できない状況にある教員とに大きく二分される。特定の教員に業務の負担が集中することもあるため、業務の平準化と効率化に向けた取り組みがさらに必要である。